
ここにはいない

廻社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここにはいない

【著者名】

IZUMI

【作者名】

風汎

【あらすじ】

僕が目を覚ますと、天井以外が変わって見えた。僕は浮いていた。

暗い部屋の中で目を覚ますと、いつもの汚い天井がそこにあった。何も考えることが出来ずに周りを見回すと、普段とは違い少し目線が高いことに気が付いた。

暗闇に目が慣れ始め改めて辺りを見回すと、壊れたパソコン、縦長の箪笥、一段に重ねた本棚、窓から見える団地の明かり、寝ているときには見えない視点があつた。

自分の不思議さに寝返りをしても不自然さは消えなかつた。

目を開けたまま、箪笥の下から一段目をぼーと眺めていた。少しづつ、少しづつだけど、自分の視点が上がっていくのに気付く。

たまに天井の木目を見ていると木目が変わっていく、動いている気がする。そんな気のせいに襲われていた。

でも今は違う。

目を閉じてゆっくり目を開く。それでも視線の位置は高くなつていつた。

「ああーなるほど」

ついつい声が出る。

いや声は実際は出でていない。口パクだ。

いやどうだらうか？

この状態で声は出るものだらうか？

僕は浮いていた。

幽体離脱という現象が僕の体に起こっていた。

不意に自分の本体が気になり体を起こし下を見ると、布団の上で

静かに眠る僕がいた。

布団の周りは散らかつていて、ゴミが散乱していた。汚い。

客観的に見るとそう思つてしまつ自分の部屋なのに。

でも片付けようと思つことは微塵も感じなかつた。

今はそんなビーフでもいいじょりも、この状態を楽しむべきだ。
面白い。

高くと思えば体はふわふわと上昇していく、低くと思えばゆっくりと下降していく。自分の意志を読み取り動く。

まるで最初から浮くことが出来る特別人間になれ、そしてこれから鳥のように外に飛び出して夜の空を自在に飛び回ることが出来ると思うと、楽しくて嬉しくて仕方なかつた。

「あっ」

もう駄目だ。

気付いてしまった。

もう戻れない。

忘れていた。

このまま忘れていたかつた。

僕はもうここから動けないだろう。

だつて見付けてしまったもの箱を…。

睡眠薬と書かれた小さな箱を…。そして動かない自分。

膝を折り自分に触れると、体温を感じなかつた。

そして上下しない胸、呼吸をしない自分がそこに虚しく横たわつ

ている。

記憶が蘇る。

頭の中にキーンと高い音が響いた。

人には一度か一度はあるだろう。死にたいと思うことが。

口では簡単に言える言葉だけど、いざ実行に移そうとする躊躇して出来ないもの。

僕はそれ何度も実行しようとして何度も躊躇つた。

そして今日僕は初めて実行し、初めて成功した。

それが成功したということは戻つて来れないってことだつた。

「誰か助けて、僕はここにはもういなければ、僕はここにいるから気付いて」

声は出ているのだろうか？聞こえているのなら僕の涙を早く止め

て。

あれから程なくして、僕はいなくなつた。
何となくわかる。

きっと僕は焼かれ、骨になり、土に帰つただろう。
けれど僕は動けずに淋しい。
誰か助けて…。
僕の声が聞こえるなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5850c/>

ここにはいない

2011年1月16日09時40分発行